

二〇〇七(平成一九)年度 研究所報告

一 組 織

所 長 兵藤 一夫
主 事 廣瀬 幸市(二〇〇七年四月一日〜九月三日)

松川 節(二〇〇七年一月一日〜二〇〇八年三月三十一日)

委 員

草野 顕之(文学部長)
藤坂 初裕(事務局長)
Robert F. Rhodes(大学院文学研究科長)
藤本 芳則(短期大学部長)
佐賀枝夏文(学生部長)
水島 見一(入学センター長)
兵藤 一夫(真宗総合学術センター長)
一色 順心(教授・仏教学)
乾 源俊(教授・中国文学)
田辺 繁治(教授・社会人類学)
浅見直一郎(准教授・東洋史学)
一楽 真(准教授・真宗学)

二 研究組織

〔特別指定研究〕

大谷大学親鸞聖人七五〇回御遠忌記念特別指定研究

研究課題 「親鸞像の再構築」

研究員 安富 信哉(チーフ・教授・真宗学)

門脇 健(教授・宗教学)

木越 康(准教授・真宗学)

山野 俊郎(准教授・仏教学)

東館 紹見(講師・日本仏教史学)

山田 恵文(講師・真宗学)

嘱託研究員 平 雅行(大阪大学教授)

小山 正文(同朋大学非常勤講師・安城市本證寺住職)

研究補助員 松金 直美(博士後期課程満期退学)

研究補助員 玉光 真人(博士後期課程在学)

〔指定研究〕

大学史研究

研究課題

研究員

「大学史関係資料の収集・公開・研究」

織田 顕祐(チーフ・教授・仏教学)

加来 雄之(准教授・真宗学)

東館 紹見(講師・日本仏教史学)

嘱託研究員 伊東 恵深(本学非常勤講師)

研究補助員

西本 祐攝 (短期大学部助教)
 藤間 哲祐 (博士後期課程満期退学)
 小野 賢明 (博士後期課程満期退学)
 大畑 博嗣 (博士後期課程在学)

国際仏教研究

研究課題 「諸外国における仏教研究の動向の把握と必要

資料の整理・収集・公開」

研究員

宮下 晴輝 (チーフ・キャップ・教授・仏教学)
 門脇 健 (キャップ・教授・宗教学)
 桂華 淳祥 (キャップ・教授・東洋史学)
 田辺 繁治 (教授・社会人類学)
 Didier Weseter (教授・フランス語・フランス文化)

嘱託研究員

番場 寛 (教授・フランス語・フランス文学)
 木越 康 (准教授・真宗学)
 松川 節 (准教授・東洋史学)
 村山 保史 (准教授・西洋哲学)
 李 青 (准教授・東北淪陷期文学・中国語)
 阿部 利洋 (講師・社会学)
 井上 尚実 (キャップ・講師・真宗学)
 藤枝 真 (講師・哲学・宗教学)
 箕浦 晁雄 (講師・仏教学)
 羽田 信生 (毎田周一センター所長)

Michael Pye (本学客員教授・マールブルク大

学名誉教授)

Mark L. Blum (ミネソタ州立大学助教)

Paul Watt (デポー大学教授)

研究補助員

山本 琢 (博士後期課程満期退学)
 宮本 浩尊 (博士後期課程在学)
 Michael J. Conway (博士後期課程在学)
 村田 知子 (博士後期課程在学)

西藏文献研究

研究課題 「チベット語文献のデータベース化」

研究員 福田 洋一 (チーフ・教授・仏教学)

小谷信千代 (教授・仏教学)

白館 戒雲 (教授・仏教学)

三宅伸一郎 (講師・チベット学)

嘱託研究員

Steven Hartwell (マルチスクリップトソリユー

ション社)

野村正次郎 (広島修道大学非常勤講師)

清水 洋平 (本学非常勤講師)

ダッシュヨバラニ (本学特別研究員)

櫻井 智浩 (本学非常勤講師)

研究補助員

松下 俊英 (博士後期課程在学)
 太田 路子 (博士後期課程在学)

真宗本廟（東本願寺）造営史研究

研究課題 「真宗本廟（東本願寺）造営史料の研究並びに『真宗本廟（東本願寺）造営史』（仮称）の編纂」

研究員 宗本廟（東本願寺）造営史（仮称）の編纂
木場 明志（チーフ・教授・国史学）

平野 寿則（講師・日本近世史・仏教史）

嘱託研究員 伊藤 延男（神戸芸術工科大学名誉教授）

川上 貢（京都市立大学名誉教授・京都市埋蔵文化財研究所長）

永井 規男（関西大学名誉教授）

山岸 常人（京都市立大学助教授）

安藤 弥（同朋大学講師）

川端 泰幸（本学非常勤講師）

江上 琢成（元種智院大学非常勤講師）

登谷 伸宏（京都市立大学博士課程修了）

研究補助員 大谷めぐみ（博士後期課程満期退学）

工藤 克洋（博士後期課程在学）

〔一般研究／共同研究〕

研究課題 「仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究―「心の教育」の所在を探る―」

研究員 皇 紀夫（教授・臨床教育学）

門脇 健（教授・宗教学）

関口 敏美（准教授・教育学）

山内 清郎（講師・教育人間学・臨床教育学）

研究課題 「新発見の安慧『俱舍論実義疏』梵文写本の研究」

研究員 小谷信千代（教授・仏教学）

箕浦 暁雄（講師・仏教学）

協同研究員 松田 和信（佛教大学教授）

福田 琢（同朋大学准教授）

本庄 良文（佛教大学非常勤講師）

研究協力員 都 真雄（博士後期課程満期退学）

相良 大（博士後期課程在学）

研究課題 「本願所寺院組織の確立と信仰文化の形成・伝播に関する歴史的研究」

研究員 豊島 修（教授・日本近世庶民生活文化史・日本宗教民俗学）

平野 寿則（講師・日本近世史・仏教史）

協同研究員 鈴木 昭英（元長岡市立科学博物館長）

根井 浄（龍谷大学特任教授）

山本 殖生（新宮市教育委員会文化振興室長）

加藤 基樹（本学任期制助教）

研究課題 「東南アジア大陸部における生成的コミュニケーション」

研究員 田辺 繁治（教授・社会人類学）

高井 康弘（教授・社会学・文化人類学）

阿部 利洋（講師・社会学）

協同研究員 松田 素二（京都大学大学院教授）

藤田 直子（元本学任期制助手）

研究協力員 矢野 博之（博士後期課程在学）

堀井 愛（博士後期課程在学）

古谷 伸子（博士後期課程在学）

研究課題 「聴覚障害者への地域生活支援のためのプログラム研究」

研究員 志藤 修史（講師・社会福祉学）

安井 喜行（教授・社会福祉学）

研究課題 「平安時代寺院聖教と古記録の研究」

研究員 佐々木令信（教授・日本仏教史学）

宮崎 健司（教授・日本古代史）

東館 紹見（講師・日本仏教史学）

協同研究員 頼富 本弘（種智院大学長・教授）

赤尾 栄慶（京都国立博物館企画室長）

杉本 理（本学非常勤講師）

堅田 理（本学非常勤講師）

〔一般研究／個人研究〕

研究課題 『浄土論註』研究―親鸞の視点より―

研究員 延塚 知道（教授・真宗学）

研究課題 「ジャック・ラカンの精神分析理論による演劇の

分析の意義と可能性」

研究員 番場 寛（教授・フランス語・フランス文学）

三 指定研究の動向

大谷大学親鸞聖人七五〇回御遠忌記念特別指定研究

本研究は、二〇一一年に迎える親鸞聖人七五〇回御遠忌に向けて、過去五〇年間にわたる親鸞研究の動向を整理・検証し、これからの親鸞研究に新たな展望を開くことを目的として研究活動を行っている。

現代においてどのような親鸞像を描くことが出来るのかということが、本研究班の主要課題であるが、従来より「a 史的な親鸞像の再検討」の研究課題を推進していくために、継続的に公開研究会を行ってきた。本年度はそれに加えて「b 思想教学の検証」「c 現代における親鸞思想との出会い」の研究推進も視野に入れて、三人の講師を招聘し、のべ四回の公開研究会を行った。

一、公開研究会の梗概

・第七回公開研究会…「この時代に「本願を聞く」ということ―何を考えるべきか―」（本多弘之・親鸞仏教センター所長）

本報告では、現代において親鸞の教えを主体的に、また持続的に学ぶということは、一体何を明らかにすることになるのかという問題に関して提言をされた。まず、曇鸞が『浄土論註』において五難をあげたことに準えて、現代の五濁とし

て科学文明、経済社会（資本主義）、マスメディア、都市化、世俗化ということあげられ、それぞれについて問題点を指摘された。そして、社会的問題に巻き込まれてしまっている現代の人々に本願の教えを語るための接木として、清水博氏の「場」という概念を取り上げられ、浄土を「場」という概念によって読み直していく可能性について語られた。また、排除の問題や、人間の理性を中心とする自力によって引き起こされる諸問題について、親鸞の教えに立って、どのように克服しうるかを考えていかなければならないという提言をされた。

・第八回公開研究会…『親鸞伝研究の諸問題』（草野顕之・本学教授）

前回の御遠忌（一九六一年）に出版された赤松俊秀の『親鸞』は、『親鸞伝絵』を骨格とした、厳密な史料批判に基づいた実証的研究として評価する事ができる。しかし一方で、親鸞の民衆性という面を十分に描ききれているとは言えない。本報告では赤松氏の研究を乗り越えるために、伝承史料を史料批判した上で用いる事で、史実として認定できるものを見出す方法を考える必要性が提議された。今後の親鸞伝研究において、「語られた親鸞像」を明らかにすることと共に、重要な研究視点を提示していただいた。

・第九回公開研究会…『親鸞の越後配流と承元の奏状―『教行信証』後序をめぐる―』（平雅行・嘱託研究員（大阪大学教授））

本報告では、密通事件を媒介とする思想弾圧であったとされる建永の法難から、越後での流罪中にかけての親鸞について、再検討がなされた。『教行信証』後序は、赦免以前の承元五年に、岡崎中納言範光の取り次ぎにより朝廷へ提出された、いわゆる「承元の奏状」であるとされる。また親鸞は流罪中、自らの預かり人となった在庁官人の三善為則の娘である恵信尼と結婚し、さらにはそれが奏状提出を可能にしたと結論づけた。史料的制約の大きい当該期について、『教行信証』後序をはじめとする既存史料の見直し、あるいは中世社会における一般的な流罪制度とその変遷について事例を提示しながら検討するという、緻密な実証研究に基づいて、斬新な見解が示された。

・第一〇回公開研究会…「この時代に「本願を聞く」ということ―何を考えるべきか―」（本多弘之・親鸞仏教センター所長）
本報告では親鸞像の再構築というテーマの下、二つの問題について提言をされた。第一に、今日盛んに取り上げられる「スピリチュアリティ」という言葉を挙げて、その内容を仏教の視点から確かめていくことの必要性を述べられた。特に清沢満之の「生死以外に靈存する」という言葉をもとに「靈（霊性、靈存）」の問題を積極的に考えていくべきではないかとの提言をされた。第二に、『教行信証』後序の「名之字」が何を指すかという問題を取り上げられた。「善信」は比叡山時代から通用していた房号であるとし、天親・曇鸞の思想をうけた二種回向の教学によって、『教行信証』は成り立っている

ことなどを根拠に、「名之字」とは「親鸞」を指しているとの所見を述べられた。質疑応答では第二の提言について、「善信」が房号であることの根拠、また『敦異抄』の「流罪以後愚禿積親鸞令書給也」の解釈や、「七箇条制誡」の署名に関して議論が交わされた。

各研究会とも、親鸞研究を今後推進していく上で、貴重な視点を提示して頂いた。また参加した研究員や研究員以外の先生方から活発な質疑がなされ、多くの意見をいただくことが出来た。なお、これまで積み重ねてきた公開研究会の成果を、シリーズ『親鸞像の再構築』として順次発刊していく。

二、文献目録の作成について
 本研究班の研究課題の一つである「d 文献目録の作成」は、前回の御遠忌以降の五〇年間（一九六一―二〇一一）にわたる親鸞研究の各部門における研究史を回顧し、資料として活用できる文献目録を作成するというプロジェクトである。文献目録の作成方針とそのサンプルについては、すでに報告を行っているが（『真宗総合研究所紀要』第二四号（二〇〇七年三月発行）、本年度も文献目録作成に向けてデータベースを構築するために、作業方針に則ってデータ入力を行った。本年度は特に『仏教書総目録』に基づいて、一九八三年、一九八四年分の日本語文献の単行本についての入力を終えた。

大学史研究

【清沢満之研究】

① 『清沢満之全集』未収録文献の翻刻作業について
 本年度も引き続き、『清沢満之全集』未収録文献の翻刻作業を行い、欧文文献・フィルムの翻刻作業を完了した。これにより目標としていた、清沢満之の未公開の自筆資料の和洋混交資料の翻刻作業を完了した。

② 清沢満之『臘扇記』の出版企画への協力

清沢満之記念会の清沢満之『臘扇記』の出版企画（影印版『臘扇記』と注釈版『臘扇記』の出版）への協力として、本研究班が担当する『臘扇記 注釈』の出版準備作業を行った。当初は、本年度中の刊行を予定していたが、注釈の内容の増加、及び注や付録のさらなる充実化などが影響し、編集作業が延び、その結果本年度中の刊行を実現することができなかった。できるだけ早期の刊行を目指し、作業を継続する。

二〇〇八年一月一二日・一三日に、愛知県碧南市西方寺、愛知県碧南市清沢満之記念館における資料調査を行った。西方寺本堂の調査、西方寺所蔵の清沢満之・西方寺関係資料をもとに『臘扇記』に出る寺院・人物・地名・書籍・引用文典・当該時期における西方寺境内の建物の配置等の調査を行う。また、西方寺における仏事・報恩講の式次第等について聞き取り調査を行った。

【佐々木月樵研究】

既に作成済みである文献目録を基礎として、佐々木月樵に関する文献の収集活動を継続して行った。

【大学史研究関係資料の保存】

当研究班の前進である真宗学事史研究・大学史編纂研究において収集された資史料の整理と保存を前年度から継続して作業を進めている。現在進めている作業として、①学寮・真宗大学・真宗大谷大学・新制大谷大学時代の史料九〇〇〇点余り（ファイル冊数全二三九冊）の長期保存に向けた保管作業。②写真史料の保管作業の二つの作業を主に行っている。一つ目に挙げられる作業は、大学史研究所蔵史料として大学行政史料をはじめとする貴重な史料群（通称「黒ファイル」）の長期保存に向けた作業である。前年度から引き続いて行っている作業として、錆による史料の劣化の進行を止めるために史料に付いているクリップやホッチキス、ピン、セロファンテープなどの留め具を取り除く作業を行っている。また、これらの史料群はクリアファイルに入れられ、縦置きにして保存されているため、中性紙封筒への移管を行い、横向きに保存する措置を行っている。それと平行して、史料と既成のデータとの照合・再調査を行い、史料情報の充実を図っている。現在、この作業は、黒ファイル二三九冊のうち、一二七冊まで終了しており、来年度も引き続き中性紙封筒への移管と再調査を行っていく必要がある。二つ目に挙げられる作業として、大学史研究が所蔵している大学の写真史料の保管作業がある。この作業については、すでに一七五点の写真史料をデジタルカメラで撮影し、閲覧・公開の準備が整っている。しかし、小型の写真史料に関しては未だに十分な処置が施されていないため、閲覧請求や公開にも迅速に対応できない状

態である。来年度以降、早急に小型写真の整理・データベース化を行うことが課題である。

【近世学事・学寮史研究】

本研究班の重要な研究課題として、近世における学事の進展に大きな役割を果たした「学寮」について、その実態と歴史的意義を考究することがある。これに関して本年度は、具体的な研究の課題を明らかにすることを目標とし、研究班全体において近世学寮勉強会を行い、『大谷派学事史』の輪読が行われた。本研究班において既に作成済みである『真宗学事史年表』を参考にしつつ、『大谷派学事史』を読み進め、学寮の歴史を紐解き、その実態と歴史的意義を尋ねることに努めた。本年度中に、研究班全体における『大谷派学事史』の輪読を終え、班員それぞれが、『大谷派学事史』より具体的な課題を持ち、今後の研究課題を発表し合った。また二〇〇七年七月二一日に、福岡県太宰府市観世音寺における資料調査を行った。

【他大学・研究機関との交流】

本年度も他大学との交流として、全国大学史資料協議会（西日本部会及び全国大会）主催の各種研究会に積極的に参加した。他大学の大学史資料室や博物館を見学し、また他大学の大学史担当者や「大学史」のあり方や、史料の収集・保存、年史編纂事業など積極的に意見交換した。本年度は特に、自校史教育のあり方が、どの学校においても課題となっており、積極的に意見交換された。学生のみならず教職員も含めた全

学において自校史教育が徹底され確立されることは、その学校の建学の精神が常に再確認され、全学に浸透することであり、非常に大きな役割を持つ。本学においても、非常に参考とすべき意見交換がなされ有意義な交流となった。

国際仏教研究

〈英語班〉

一、国際真宗学会大会

二〇〇七年八月三日(金)～五日(日)、カナダのカルガリ大学で開催された第一三回国際真宗学会大会に当研究班を中心としたパネルを組んで参加した。木越康研究員、井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ研究補助員に加えて、真宗学科の加来雄之准教授・一染真准教授を招聘して準備を進め、*“Transcending Dualism: Neither Monastic nor Secular as a Way through the Troubled World”* (二項対立を超えて：混乱する世界を渡る方途としての「非僧非俗」と題して、教学的・歴史的観点から、親鸞の「非僧非俗」という表現に込められた思想の現代的意義を解明する発表もおこなった。会場の聴衆との質疑応答も約二〇分に渡り、活発な議論が交わされた。前回二〇〇五年に武蔵野大学で開催された大会に続いて今回も大谷大学パネルを設けることができたことは、国際真宗学会の学問的活性化に貢献する意味でも有意義であった。このパネルで発表された論文は二〇〇八年に発行される学会誌 *The Pure Land* (New Series No. 24) にまとめて掲

載されることになっている。次回の大会は二〇〇九年六月に龍谷大学で開催される。

二、アメリカ宗教学会大会

一月一七日(土)～二〇日(火)の四日間、米国カリフォルニア州サンディエゴ市で開催されたアメリカ宗教学会 American Academy of Religion の二〇〇七年大会に井上尚実研究員が参加し、日本宗教学部のパネル *New Way of Thinking about Shinbutsu Bunri (Differentiation of Kami and Buddhist Deities and Practices) in Japan* において *“Shinbutsu Bunri as a Radical Disembedding of Local Religion: The Case of Ono Village in the Northern Ina”* と題した研究発表を行い、海外の仏教研究者と交流した。次回二〇〇八年の年次大会は一月にシカゴで開催される。AAR の大会は、国際仏教学会 (IABS) の大会とともに欧米の仏教学研究者が集まる重要な国際学会なので、研究の動向の把握と交流のために、今後も英語班から代表を送ることを継続していく必要がある。

三、ヨーロッパ日本研究協会国際会議

二〇〇八年九月二〇日(土)～二三日(火)まで、南イタリアのレッツェ市サレント大学において第一二回ヨーロッパ日本研究協会国際仏教会議 (International Conference of the European for Japanese Studies) が開催される。前回二〇〇七年のウィーン大会につづいて近代真宗に関する大谷大学パネル発表が認められたので、その準備を進めた。今回の

宗教・思想史部会の全体テーマは Religion as Discourse: Performanse and Performativity in Establishing and Contesting Authority (フェイスコースとしての宗教：権威の確立と権威に対する異議申し立てにおけるパフォーマンスと遂行性)であり、英語班で検討を重ねた結果、「Where Have All the Pure Lands Gone?: challenging and Developing Doctrinal Authority in Modern Shin Buddhism」(浄土は何処へいったのか?：近代真宗における教学的権威への挑戦とその発展)というテーマで、近代教学における「浄土」理解の問題に焦点を当てた論文発表三本とそれへの応答からパネルを構成することになった。定期的に英語班研究会を開いて各発表の準備の進捗状況を確認し、内容について討議を重ねた。

四、近代教学の英訳論文集 An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings 出版に關して

前年度に引き続き、ニューヨーク州立大学の Mark L. Blum 教授(当班嘱託研究員)をお招きして出版に向けた編集・校正の最終作業を進めた。年度末の春休みに研究所のリリースベースで集中的に作業を行ない、二〇〇八年度中にニューヨーク州立大学出版(SUNY)から出版できる目処があった。今回、大谷派の近代教学を代表する清沢満之・曾我量深・金子大栄・安田理深の主な論文を集めた英訳が出版されるのに合わせて、海外の研究者を招いた記念シンポジウムを大谷大学で開催すべく、英語班としてその企画に入った。

〈ドイツ・フランス班〉

一、二〇〇六年に行われた「大谷大学真宗総合研究所・フランス国立高等研究院(EPHE)合同シンポジウム：宗教と近代合理的精神——日仏文化の比較をとおして」をうけて、シンポジウムでの発表やコメントを編集して出版すべく、執筆編集作業を行った。

二、マルブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシュ教授の著書『マルティン・ルター』の翻訳作業を進めている。翻訳終了次第、出版という形で公表を計画している。

三、EPHE(フランス国立高等研究院)・CNRS(フランス国立科学研究中心)において、ジャン・ポール・ヴィレーム教授(EPHE)と二〇〇九年五月合同シンポジウムについての打合せをした(井上尚実研究員：三月一三日)。

シンポジウムのテーマの候補として、「ナショナル・アイデンティティと宗教」、「宗教の分野における公共政策」と「市民宗教の問題」、「異文化多国籍の人々の共存(グローバルゼーション)」と政府の宗教政策、「宗教と世俗化」が挙げられた。

打ち合わせを受けて、研究班においてテーマの決定をした。EPHE側が提示した幾つかのテーマの中から、発表者が自由に選択してテーマを決定することとするが、基本的に大谷大学側の発表は、日本社会(特に現代社会)における宗教という共通テーマを含むこととした。

〈中国班〉

一、大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の資料一覧作成

二〇〇五年度に開始した中国東北・東部モンゴル地域関連資料の一覧作成作業を今年度も継続し、中国華北関連の綴資料（仮番号一九〇二五）の目録作成作業を完了した。また、これと関連して、左記の通りの公開研究会を開催した。
二〇〇七年七月二四日（火）

「満洲引揚げ日本人布教者たちの六十年前の声」木場明志・本学教授

『吉林省志』に記述される満洲国治下の仏教について」桂華淳祥・研究員

「満洲国における東本願寺の開教活動の足跡——書簡にみる開教地情報の伝達——」山本琢・研究補助員

「二〇世紀前半期、東本願寺の中国華北地域における活動について——昭和一七年までの布教所設置地区の確認——」大谷大学大学院文学研究科博士後期課程 福島重

二、中国東北師範大学との共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

二〇〇七年八月二五日（土）～八月三一日（金）、桂華・松川の研究員二名は中国の東部モンゴル地域（内モンゴル自治区シリングゴル盟正藍旗・多倫縣、赤峰市翁牛特旗、遼寧省阜新蒙古族自治縣、朝陽市、河北省承德市）及び北京市において、モンゴル仏教・華北仏教についての調査を実施した。

二〇〇七年十一月九日（金）～十一月二日（月）、桂華・松川の研究員二名と木場明志本学教授は中国東北師範大学（長春）を訪問。副学長の張紹杰教授と面談し、共同研究の成果として、木場明志・程舒偉（編著）『日中兩國の視点から語る植民地期満洲の宗教』が出版されたことを報告した。さらに、双方の研究員による研究交流会が開催され、最近の研究状況を報告しあい、今後の活動について打ち合わせを行った。

二〇〇八年三月一六日～二二日、程舒偉東北師範大学教授、智利疆東北師範大学講師を招聘し、桂華研究員、木場本学教授、浅見直一郎本学准教授、松川主事とともに本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

三月一九日（水）

「民国時期華北地方の宗教の東北地方における伝播」東北師範大学歴史系 程舒偉 教授

「偽満洲国時期における「国家祭祀」の日本化」東北師範大学歴史系 智利疆 講師

通訳：李青・本学准教授

二〇〇八年三月二七日（木）～三一日（日）、桂華研究員、松川主事は中国の華北地域（山西省太原市内・太原市北郊・交城県・晋中市）において、華北仏教についての調査を実施した。

西藏文献研究

一、大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化

A 北京版チベット大蔵経の研究

北京版チベット大蔵経所収のテキストに対する研究として、対象としたテキストは、世親造『縁起経釈』(『*Ten cing 'brel par 'byung ba dang po dang man par dbye ba, Pratyksamuhadanyakhoz*』(Pek. 5496))である。本テキストは、世親の縁起観を表明しているものであり、彼の思想的変遷を知る上で極めて重要なものである。二〇〇七年度は、北京版にもとづきテキストを入力し、デルゲ版との校合をおこなった。

B 蔵外チベット語文献の研究

この研究では、本学図書館、本研究班所蔵のチベット語文献の公開を目的とした電子テキスト化が中心となっている。二〇〇七年度は、本研究班所蔵のチベット語文献のうち、ツァンニョン・ホールカ (Gtsang smyon he ru ka Rus pa'i rgyan can, 1452-1507) 『ヤンン伝』(『*Sgra bgyur mar pa lo tsa'i man par thar pa mthong ba don yod*』) およびラ・イェシユエ・センゲ (Rwa Ye shes sengge) 『呪力自在者・尊者ヲ翻訳師伝・広播妙鼓音』(『*Mthu stobs dhang phyug rje bhsan rna lo tsa wa'i man par thar pa kun khyab sngan pa'i nga sgra*』) の電子化をおこなった。これをWeb上で公開した。また、すでに公開済みの『ミラレーバ伝』について、再度原本との厳密な校正をおこない、校正済みのデータを公

開した。

二、TLKのバージョン・アップ

Apple Worldwide Developers Conference 07 参加のため、六月九日から二〇日まで野村正次郎嘱託研究員をアメリカ・サンフランシスコに派遣した。氏は、開発作業に不可欠な情報の収集やApple社の開発担当者との打ち合わせ等にあたるとともに、ステープ・ハートウエル嘱託研究員との開発作業をおこなった。こうして完成させられた「Kaiaja」「Konor」という二種類のUnicode対応フォントおよびチベット語対応キーボード配列を含むチベット語システムは、Apple社に正式採用され、一〇月二六日に世界同時発売されたApple社の新OS「Mac OS X 10.5 Leopard」に搭載された。詳細は『研究所報』第五二号(二〇頁〜二二頁)掲載の研究開発報告を参照されたい。

三、公開研究会の開催

一二月一日(火)には、インド・サルナートにあるチベット学中央高等研究所(Central Institute of Higher Tibetan Studies)の研究員シヤムン・サムテン博士(Dr. Jampa Santen)を招き、「インド文献のチベット語訳とその特徴」(rGya gar gyi rtsom gzhung bod skad du bgyur ba dang dei khyad chos)と題して、一二月二日(火)には、ロシア国サンクトペテルブルク国立大学(St. Petersburg State University)のウラシール・ウスハンスキー教授(Prof. Vladimir Uspenskiy)を招き、「ロシア所蔵北京版西

蔵大蔵経について (Udayana Buddha statue: its fate in Russia)」のテーマのもと、三月六日(木)には香港大学仏教学研究センター(The Center of Buddhist Studies of Hong Kong University)の客員教授 A・A・テレンチョフ博士 (Dr. Andrey Anatolyevich Terentev) を招き、「ロシア・ブリヤートに現存する栴檀釈迦立像について」のテーマのもと、それぞれ公開研究会をおこなった。

四、国際学会への参加

二〇〇七年七月一七日から七月二〇日までの日程で、ドイツのハンブルグ大学にて、1st International Congress on Buddhist Women's Role in the Sangha: Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages (第一回僧伽における仏教徒女性の地位に関する国際会議：比丘尼律と受戒の系譜) が開催された。ダシュ・ショバ・ラニ囑託研究員はこの会議に参加し、「Misinterpretations of the Buddhist Texts and the Problem of Ordination of Women」(仏典の誤解と女性の受戒についての問題)と題する発表をおこなった。詳細は『研究所報』第一五号(一七頁～一八頁)所載の海外学会参加報告を参照されたい。また、会議終了後は、ハイデルベルグ大学南アジア研究所 (South Asia Institute, University of Heidelberg) を訪問し、同研究所でおこなわれている「オリッサ・プロジェクト (Orissa Project)」に従事する研究者との交流をはかり、とりわけ同プロジェクトがカタログ化に取り組んでいる貝葉写本に関する情報を収集した。

五、パリー語文献研究

旧パリー語文献研究が所蔵する貴重な東南アジア撰述パリー語貝葉写本のデジタル資料の整理作業をおこなった。また、大谷大学所蔵パリー語貝葉写本に関する国内外からの教多くの問い合わせに対する対応として、二〇〇七年一〇月四日、大谷大学所蔵パリー語貝葉写本に関する Malachulalongkornrajavidyalaya University との共同研究に関するミーティングをおこなった。二〇〇八年二月二五日には、清水洋平囑託研究員が三重県菰野にある Paramita Museum にて当該文献の紹介をおこなった。

六、オリッサ州立博物館所蔵貝葉文献の研究

九月に、小谷信千代研究員とダシュ・ショバ・ラニ囑託研究員の二名がインド東部オリッサ州に出張した。当初はオリッサ州立博物館との共同研究契約締結のためであったが、条件が折り合わず、同州にある SARASVATI 貝葉写本研究所周との間で、同研究所所蔵の約八〇〇〇本にもおよび貝葉写本研究に関する共同研究の契約が結ばれた。この契約にもとづき、二〇〇八年一月二〇日(日)～二〇〇八年二月二〇日(水)までの間、当該写本に対する descriptive カタログ作成のため、ダシュ・ショバ・ラニ囑託研究員が出張、調査にあたるとともに、今後の研究業務が円滑に進行するよう、現地研究者あるいは目録作成担当者に対する指導をおこなった。

七、その他

寺本婉雅関係資料の調査

北京版チベット大蔵経をはじめとする本学図書館所蔵のチベット語文献を将来した(とされている)寺本婉雅氏関係の資料が、富山県南砺市城端にある宗林寺に所蔵されていることがわかり、清水洋平囑託研究員、松下俊英・太田路子研究補助員および三宅伸一郎研究員の四名が、二〇〇七年八月八日(水)〜一日(木)の日程で宗林寺に出張、チベット語文献三四点、パリー語文献一点、直筆資料六点の整理・調査をおこない、保存措置をおこなった。

真宗本廟(東本願寺)造営史研究

「真宗本廟(東本願寺)造営史研究」は、二〇一一年の宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌に向けて、真宗大谷派と本学との間で業務委託を締結して発足したプロジェクトであり、二〇〇六年八月以来、真宗総合研究所に移管した東本願寺資料の調査・研究を継続している。なお、本プロジェクトは、二〇〇九年度までの四年間を調査・研究期間とする。

本研究においては、東本願寺資料を中心に本廟造営に関わる諸資料の調査・整理・研究を鋭意進め、本廟の造営再建の歴史を明らかにすると共に、『真宗本廟(東本願寺)造営史』(仮称)の編纂を行うことを目的とする。二〇〇七年度は、前年度に引き続き、両堂再建を中心とする真宗本廟造営に関する諸資料の精査・分類・翻刻、執筆用資料ファイルの作成を進めると共に、公開研究会・個別課題の研究報告会の成果をふまえて、『本願を受け継ぐ人々―真宗本廟(東本願寺)造

営史―』の書名及び内容目次を確定し、各執筆者の選定と依頼を行って原稿執筆の段階に入った。以下、昨年度の具体的な研究活動と経過について、研究推進計画として掲げるⅠ造営史の全体像の把握、Ⅱ資料調査、Ⅲ文書翻刻、Ⅳ国内資料調査、Ⅴ『真宗本廟(東本願寺)造営史』の目次作成、Ⅵ研究会の各項目に基づきながら、順次に進捗状況を報告する。

まずⅠ全体像の把握では、本山機関紙によって明治度造営進行過程史料を整理すると共に、その図表化から作事組織のあり方と変遷、担当部署における事業内容の把握が行われている。また江戸期造営に関しては、東本願寺資料から関連諸資料の抽出・写真撮影を行い、それぞれの再建ごとに分類・整理・分析を進めている。

Ⅱ資料調査については、東本願寺資料の内、財務部所管の両堂再建資料に関しては、段ボール二三四箱(約六〇〇〇点)中、一箱〜二三箱、二〇〇箱〜二三四箱(一部を除く)の調査が終了し、残る二四箱〜一九九箱についても、抽出した関係資料の調査が終了している。なお左記資料群の中で、『献木上申書』『献木適用簿』については、データベース化及び統計・グラフ化が図られ、明治度造営における献木状況や寄進の動向が把握されつつある。また諸国詰合、世話方、示談方の人名データベース化が進められており、在地から寄進される材木の動きと共に、献木を仲介した人々やその組織の実態についても分析が行われている。さらに、数多く伝来する絵図面類については、建築史的見地からの整理・分類も行われてお

り、今までは明らかでなかった再建造営の諸相が漸次に解明されつつある。

III 史料翻刻については、造営・焼失・再建の全般的な動向と、その具体的な様子を把握するために、東本願寺資料をはじめ、他機関所蔵の関係資料の全文翻刻または関連記事の抄出翻刻が順次に進められている。以下、翻刻を完了した諸資料の一部について、所蔵機関別に列挙すれば、次の通りである。

【東本願寺所蔵】

『天明・文政・明治御再建年月日調書』『御影堂、本堂等建築に付日程覚』

『御影堂棟上記』『東本願寺御堂御遷座之記』『御再建日記』(三―六卷)

『御影堂雜録』(五、一一号)『公儀御裁許書留書』『御寺内境土居之一件』

『拝領材木等一件』

【大谷大学図書館所蔵】

『再建につき御使僧演説の大意』『天明八申年御類焼後御前通窓御門兩脇石垣一件』

『東本願寺焼失ニ付心得之事』『本山回録塗聴記』『東本願寺御堂御再建御書写』

『万延元年仮御堂御遷座并供養』『天明元治御類焼之記』

【国立国会図書館所蔵】

『東本願寺炎上記』『豊臣秀吉朱印状』

【新潟木揚場所蔵】

『百事日誌』(第四―六)

【城端別院善徳寺所蔵】

『御再建見聞私記』

この他に、東京大学史料編纂所に所蔵される大谷派本願寺文書・妙安寺文書・本願寺文書の影写資料についても、それぞれ関連する箇所を翻刻を終了している。

IV 国内資料調査では、五月三日に富山県南砺市において真宗大谷派城端別院善徳寺の再建関係史料調査、翌四日には、同福光・刀利地区における献木史料と聞き取り調査、および高岡市伏木の真宗大谷派法輪寺における献木用材記録の調査を実施した(詳細については、「二〇〇七年度第一回真宗本願寺(東本願寺)造営史に関わる史料調査並びに聞き取り調査報告」『研究所報』第五一号を参照)。また八月九日―一〇日には、東京大学史料編纂所・国立公文書館内閣文庫・東京都立中央図書館木子文庫において、再建造営に関わる諸資料の閲覧と調査を行った。こうした国内資料調査は、本山から移管した東本願寺資料の補助調査と言うだけでなく、むしろ地域の末寺・門徒の助力と信仰の様相を窺い知るための資料の発掘調査であり、国内資料調査を通じて、造営史全容のさらなる理解に努めている。

V 真宗本願(東本願寺)造営史(仮称)の目次作成については、本プロジェクトの研究成果が具体的に明示されるものであり、研究推進計画の各項目が有機的に結合する中で見

極められなければならない。そこで昨年度来の調査・研究をふまえ、一月一日の第七回全体会議において、刊行物の書名を『本願を受け継ぐ人びと―真宗本願（東本願寺）造営史―』（本編・資料編）と確定し、現時点における細目目次を決定し、合わせて執筆者を選定した。但し、目次については、具体的な資料の解説や分析、執筆状況の中で、種々の変更が予想される。また書名の確定と目次の決定、執筆者の選定を受けて、二〇〇八年二月一五日の第八回全体会議において編集委員会を発足し、同月二十九日に各執筆者に執筆依頼状を送付した。

VI 研究会については、公開研究会と個別課題の報告会を定期的に実施してきた。公開研究会は、嘱託研究員を中心に四回開催したが、多数の貴重なご意見を頂戴することができた。

第五回目…山岸常人氏（講題「建築指図書料への視点」）

第六回目…川端泰幸氏（講題「東本願寺再建の根拠―東西分派伝記・宗主消息を読み直す―」）

第七回目…登谷伸宏氏（講題「飯両堂の建築について」）

第八回目…江上琢成氏（講題「明治造営開始期の精神史」）

また個別課題の報告会では、再建造営をめぐる諸問題が、順次に取り上げられると共に、刊行物の全体構成・章立て・目次内容についての検討が行われた。

四 『研究所報』の刊行

第五〇号（五月一日発行）

リサーチライブラリー 宮下晴輝

二〇〇七年度「指定研究」研究組織一覧

二〇〇七年度「指定研究」研究目的紹介

二〇〇七年度「一般研究」選考結果発表

二〇〇七年度「一般研究」研究目的紹介

学会参加報告

海外研究調査出張報告

特別研究員研究成果報告

彙報

第五一号（一〇月一日発行）

学术交流の拠点としての真宗総合研究所 兵藤一夫

二〇〇六年度「指定研究」研究経過報告

二〇〇六年度「一般研究」研究結果概要

海外学会参加報告

研究調査出張報告

特別研究員研究発表会

彙報

執筆者紹介

(二〇〇九年三月三十一日現在)

東館 紹見	本学准教授
宮崎 健司	本学教授
頼富 本宏	種智院大学教授
赤尾 栄慶	京都国立博物館企画室長
杉本 理	本学非常勤講師
堅田 理	本学非常勤講師
大畑 博嗣	研究補助員
曲 晧范	東北師範大学教授
劉 景嵐	東北師範大学副教授
皇 紀夫	本学教授
門脇 健	本学教授
関口 敏美	本学准教授
山内 清郎	本学講師
大野 僚	本学任期制助教
小谷信千代	本学教授
秋本 勝	京都女子大学教授
福田 琢	同朋大学准教授
本庄 良文	佛教大学非常勤講師
松田 和信	佛教大学教授
箕浦 晧雄	本学講師

番場 寛

本学教授